

「表象に関する総合的研究」2007年度第二回研究会

日時：2008年2月23日（土曜日）午後1時半より6時

場所：AA 研小会議室(302)

報告者と報告タイトル：

1. 高知尾 仁（AA 研所員）

「ホモイオーシスと形像・形姿」

2. 深澤 秀夫（AA 研所員）

「反乱という表象 精神分析への旅—オクタヴ・マノーニのマダガスカル—」

報告要旨

「ホモイオーシスと形像・形姿—表象についての概要（2）—」

表象の特性は、一つは、現前しないものを代表すること、代理すること、あるいは代替することであるが、もう一つは、現前しないものに形を与えること、と考えられる。人間と、あるいはその集団と、現前しないものとの関係を、表象は、分離しつつも結びつける。それは、分割を拒否することなく、交わせることなのだ。

今回の表象についての概要を示すために、この二番目の特性について考えた。一番目の特性については、既に著書の中で述べたものであるためである。

ヨーロッパの思想においては、表象としての形は、形の認識、形の形成の二面がある。前者は、形姿にかかわり、後者は、形像にかかわるものと考えられる。それは、一つには、外形・輪郭と中身（内面、個性）を区分し、もう一方では、それらを結びつけることとなる。形はまた、超越的なものとの類似性（ホモイオーシス）により、存在と存在者＝被造物、不可知性と可知性、不可触性と可触性、精神性と身体性とを分離しつつも結びつける。プラトンが、それをパラダイグマとエイコーンの類似性（ホモイオーシス）と認識し、形に関する言説の出発点を提示したことは言うまでもない。この結合とは、後に社会的結合を意味することになるコイノニア、あるいはメテコメン（分有する）という言葉で表現された。

イエスやパウロの同時代人フィロンによって、ヘブライ語聖書での人間の創造は、神のエイコーンに倣った、それに似たもの（ホモイオーシス）として造られたものと、語られた。この類似ゆえに、人間は、可感的でイデア的、可死的で不可死的なものの境界、あるいは二重性と認識された。

ギリシア教会の聖職者たちは、フィロンによるような旧約における人間についての表現と、ギリシア哲学における形についての表現を関連づけることで、アダムの創造とキリストの受肉に連続する類似性による救済を説明していった。類似とは、オリゲネス（c. 185-253/ 4）にとっては、神の像に倣った存在者の神との類似を意味し、救済の目標であ

った。この像は、カラクテールという言葉で表され、神の栄光の反照・輝きを意味し、人間が感じ取れるように調整された反照は、光からの連続した発出と語られ、霊的なものと物質的なもの、可視的なものと不可視のものという深淵を結びつける仲介者と語られた。ここに、存在と被造物との間に置かれた裂け目＝共約不可能性を橋渡しする可能性の提示が見られよう。この仲介性は、プロティノスの哲学の受容によって、さらに強調されていた。

ギリシア教会において、ローマ帝国の国教化の時代を迎えて、類似、あるいは像は、物質的な画像においても同様な意味を見出していった。エウセビオス (263/5-339/40) によって、キリストの像 (エイコーン) は、不変的な意味を示す寓意的な形であるシュムボロンと、刻印を意味し、画像的な形であるカラクテールという言葉で示された。シュムボロンは、それが指し示す原型的啓示の変容・翻訳、あるいは代わりのものであり、光の反照の如く不可視の神と人間の知覚の限界を仲介することになるし、カラクテールは、刻印と印影の類似性のように、形像とそれが表象する神性との間の類似性を帯びることで、原型的存在からの生成、つまりは発出を意味するに至った。偽ディオニュシオス・アレオパギテース (500 頃) は、信仰の、教会のヒエラルキアを形成する物質的な導きによってのみ、人間の知性は、非物質的な天上のヒエラルキアの模倣と観想へと昇ることができるがゆえに、聖なる形像によって非形像的な類似へと高められる、と語っていた。聖なる画像であるシュムボロンによって、隠されたものを目に見えるものとし、不分割のものを分割し、形状や輪郭のないものに形状や輪郭を与え、神の形を呈する隠された秩序の美を、教えているとされた。こうして超越と物質世界との間にある相違は、克服されたと考えられた。

ギリシア教会は、さらに、聖像－偶像論争の時代を迎え、同様な用語と論理で、聖像擁護論を展開した。ストゥディオスのテオドロス (759-826) は、物質的な画像でも、想像しえた像でも、刻印を意味するテュポス、あるいはカラクテールという語でもって言及し、また、視覚可能な像をモルフェーという語でもって語り、それらが形而上の原型に類似するものであることを示した。つまり聖なる画像は、原型を分有する似姿であり、真正な形を担うものされた。こうして、キリストにおいて原型と似像が一体化したように、聖なる画像においても原型と似像が一体化する、という論述が導かれた。但し、ニケフォロス (806-15 在位) は、原型と似像の関係を同一性としてではなく、類似性として語っていた。本質の相違と、外形 (モルフェー) の類似によって、イコンは、不在なものを顕在化し、原型とは連続したもの、印影として押された原型の刻印が認められたもの、と理解された。

この一連の言説において、現前していない物に形を与えることであると考えられる表象という観念の歴史を見て取ることができる。模像の模像としてプラトンによってあらぬものとされた画像の神秘化、原型との一体化という考え方の出現と、そうした考え方の否定の現れこそが、こうした表現を可能にする時代の政治状況に関連すると思われる。

(高知尾 仁)

配布物：レジュメと資料。

「反乱という表象 精神分析への旅－オクタヴ・マノーニのマダガスカル－」

後にジャック・ラカンの共同研究者として知られることになるオクタヴ・マノーニは、1926年から1945年までの19年間、すなわち人生の27歳から49歳までを、公立中・高等学校の教員およびフランス共和国マダガスカル政府広報局局長として、植民地下のマダガスカルにおいて暮らした経験をもつ。一度帰国した後、再び1946年から1948年頃まで政府の公務を帯びてマダガスカルに滞在し、1896年のフランスによる植民地化以降最大のマダガスカル人による武装抵抗であり、直接間接の犠牲者数10万人とも推定される1947年の反乱を現地において体験した結果、マノーニは『植民地化の心理学』1950年を執筆することとなった。植民地化された地域の人びとの典型的な性格を依存コンプレックス、植民地化する人びとの典型的な性格を劣等コンプレックスと呼び、あたかも植民地化を大人の子供に対する教育のごとき必然であるかのように説明を試みる『植民地化の心理学』における有名な心理学的類型化に対しては、出版直後からエメ・セゼールの『植民地主義論』1950年やフランツ・ファノンの「植民地原住民のいわゆる依存コンプレックスについて」1951年など、被植民地化側の人びとからの激しい反撥と批判を巻き起こした。1956年の英訳版からタイトルが『プロスペーロとカリバン』と改題され、1980年代からのポストモダン批評やポストコロニアル批評の中で、シェイクスピアの『テンペスト』についての新しい読みの可能性を示した書として再度注目を浴びることとなった。当のマダガスカルにおいてもマノーニの名前は、人名辞典などで触れられることは無く、また彼の著作への言及もほとんどなく、そのことは、1908年から1910年までのわずか3年間の滞在ながら、帰国直後の1913年に『ハイン・テーニ マダガスカルの民衆詩』を出版し、現在なおマダガスカル民衆詩研究の分野では先駆者として必ずその名が挙がる『フランス新評論』誌の編集主幹を長年務めた評論家のジャン・ポーランとは、好対照をなしている。

『植民地化の心理学』については、1990年の英語版再版の序においてマダガスカルにおける調査に長年従事してきた社会人類学者のM.ブロックが、被植民者および植民者双方にとっての植民地経験の重要性にマノーニが先駆的に着目したことを評価しつつも、反乱の置かれた国内外の政治情勢に対する配慮の欠如、反乱における「非合理性」に焦点をあてた説明のエキゾティシズム、分析の対象と置かれているはずのメリナ族の習慣や民族誌的細部の無知、そして当の心理分析を可能とするような資料そのものの不足を挙げ、徹底した批判を行っている。これに対し私自身は、マノーニとポーランが、フィールドワーカーが体験するエキゾティシズムの両極であり、かつ一対であるとの視点から、『植民地化の心理学』をテキストとして読み込む作業を行った。ポーランがマダガスカルに降り立った瞬

間から自分とマダガスカル人の双方が置かれた日常生活の端々に驚きを見出し、<マダガスカル人>なる共通の存在をにべもなく否定するマダガスカル現地での布教活動に従事してきた老神父のことばに深く共感するのに対し、マノーニが遺した日記からは自分を中心としたマダガスカルにおける風景が描かれはするものの、そこにおいてマダガスカル人は常に遠景をなしているにすぎないことが読みとれ、実はマノーニは1947年反乱に直面するまでの20年間、<マダガスカル人>なる存在を対象化して考えたことなど一度としてなかったことが推測される。1947年反乱が、マノーニに、歴史家のS. グリーンブラット言うところの「驚き」を誘発したことは想像に難くない。しかしながら、『植民地化の心理学』は、ともすると依存コンプレックスと言う被植民地化を正当化するようなスキャンダラスな心理学的類型のみに焦点があてられ論じられるが、マノーニ自身が述べるように、依存コンプレックスは劣等コンプレックスとの対である点が見過ごされてはならない。反乱の勃発した1947年3月29日夜半からほどない4月上旬に、マノーニが書き記した一連の日記には、反乱を起こしたマダガスカル人自身よりもその反乱に直面したフランス植民者たちの混乱ぶり、および反乱の動きを事前に察知しながらこれを見過ごしたフランス当局への懐疑が、詳細に綴られている。1947年反乱を総督府が置かれたタナナリヴにおいて体験したマノーニにとっては、ひどく貧弱な武器を手にした第二次世界大戦後の近代的軍隊を攻撃したマダガスカル人の行動はなんら現実的な脅威ではなく、そのような行動自体が当初マダガスカル人の非合理性や狂信性を強く印象づけたとしても、それさえ自らの心理学的類型の中で容易に説明できる現象であった。むしろマノーニにとっては、知能的また精神的には全く問題のない「同じフランス人たち」の反乱をも含めた植民地マダガスカルにおける不可解な行動の方が、多くの言葉を費やして説明すべき課題であった。ここに、マノーニのその後の精神分析への旅の始まりがある。

マノーニは、晩年のインタビュー録の中で、「わたしたち自身を離れること、それが私の歩んだ道だ」と答えている。このマノーニの言葉は、マダガスカルと言うフランスの一植民地で生活した経験の中から、自己同化の拒否と言う立ち位置を獲得してきたことを語っているようにも響く。しかしながら、反乱後のホテルの食堂でボーイが、<ガイジンさん>と総称する他の白人植民者の客と区別し、<旦那さま>とマダガスカル語で自分に呼びかけるようになったエピソードを得意げに記述するマノーニには、自己同化を拒否する意志は存在しても、他者同化の願望はどこにも見出されはしない。マダガスカル滞在中に、「マダガスカル人を、意図的にフランスの文化や観念から引き離すべきである。そのかわりに、彼等に自分たちの旧体制に戻ることを完全な自由を与え、それを後押しすべきである」とさえ書き残し、フランス植民地体制をも越えてゆくエクゾティズムを体得したポーランに対し、マノーニは、「わたし自身を離れ」その次ぎにどこに立ったのか。もしそこが、「根底から分裂し、ひき裂かれ、自分で想像している存在とは別な何か」である「無意識的なもの」であるならば、「精神分析は、何が起きていたのかを発見するのに役立つ。これらの出来事について報告する旅行者たちは、報酬として自らの願望を現地民に対して投

影するのである。この投影こそが、彼らを依存行動の心理学の理解から遠ざけ、彼らに依存を物事の本来の秩序の逆転と考えさせるのである」と書くマノーニにとっての反乱とそこにおけるマダガスカル人とは、マノーニその人の意志の投影と言う表象であることを最後まで免れえなかったと言えよう。

(深澤 秀夫)

配布物：レジュメと資料。